

人里のニエスレタ

日本ホテルの会 2000/9 第15号

共に生きる

日本ホテルの会理事 本多和彦

「虫がきらいである。」私は日本ホテルの会理事という大役を仰せつかっているが、当会の他の人、会員のみなさんも含めて虫好きの多い中、異端の者である。バッタやカミキリなど、離れて動いているのを見るのは何とも思わないし冷静でいられるが、彼等は飛ぶのである。飛びつかれでもしたら大いにパニックとなる。こんな私であるが、地域（横須賀市）での活動を含めると、かれこれ17、8年水辺環境に関わってきた。これは虫は恐いが、虫達の棲めない世の中はもっと怖いと思って来たことに起因するようである。

昭和30年代前半に三浦半島に生まれ、水田や里山で遊んだ記憶とそれらがみるみる住宅にかわってゆくところを見て育って来た。小さな頃には、横須賀でいうところの谷戸に住んでおり、玄関にベンケイガニがいたり、屋根裏に青大将がいたりしたものである。記憶には無いが6月にはホテルもいたのではないだろうか。その景色もいつの間にかすっかり遠いものとなってしまう、虫達も身の回りから姿を消してしまっている。相変わらず蝉はうるさく、暑苦し

く鳴いてくれているが、シオカラトンボやモンシロチョウなど当たり前の生き物が、身近な生活の中に登場して来なくなっている。いつも夏が来ると思う、今年も蝉は鳴くのだろうか。「沈黙の春」も恐ろしいが、蝉の鳴かない静かなる夏、これも相当に深刻で恐ろしいことであると思う。生物がその持つてうまれた性質なりに生きられる世界、これは人が人らしく暮らせる世界でもある。人はこれまで長い期間に渡って自然に濃密に関与し続けて来た。荒れ野や湿地を田に変え、炭を焼き、たき木をとり、水を治めて来たのである。この結果、自然は大いに影響を受けつつ変遷し、人間のつくり出す環境に適応して来た。これが人里であり、多くの人々の心の中で原風景となっている。しかし、このように、自然が人につきあってくれ、共に生きて来たにも関わらず、20世紀になって、人間はひとり加速し身近な生きる仲間を踏みじり、置き去りにしてしまった。

90年代に入って、いろいろなところ、例えば開発関係者、製造業関係者、あるいは行政機関などから「共生」という言葉を

良く聞くようになった。「環境との共生」、「自然との共生」、「持続可能な発展」等々、いろいろな表現があるが、人間の都合、すなわち経済性や効率性だけでなく、共に暮らす生き物を、取り巻く環境を考えようとするものである。私達は、多くのものを失って漸くあたりまえのことに気付きはじめたということだろうか。今さら遅いよ、口先だけだよ、と思われる方も中にはおられると思うが、いやいやまだまだ決して遅くないと、信じたい。今、残されている人里を継承し、失われたものがもう一度よみがえることを信じて、共に生きる努力をし

たい。未来に、蟬の鳴かない夏がやって来ることのないように。

(追記)

巻頭は理事が書くということで、書かせていただきました。日本ホテルの会は、自由な考えを述べられる場でありたいと考えております。ニュースレターは、会員の皆様の自由な考えを示していただく場であると認識しており、皆様からのご意見や報告、情報提供などで紙面を充実させたいと考えております。地域的なものなど大歓迎ですので事務局宛お送り下さるようお願い致します。

安全、安心、安寧な生活環境を目指して

米沢ホテル愛護会 関谷寛隆

私は長い間、蛍保護を通じて自然との共生や、水問題を追求して参りました。そして蛍と言う生物の保全や生存の意義の大きさを改めて確信してきました。

皆さん御承知の如く、ゲンジ蛍は、水が綺麗で、緑が豊かで、大気が澄んだ地域に生息し、ヘイケ蛍は同じような場所の田圃や畑の周辺に生息しており、ヒメ蛍は山間地に生息し、陸生の蛍で、メスは飛翔することが出来ず行動が限定されており、オスは活発に活動して、オレンジの光を発する蛍で、他に移動することが不可能な生き物なのです。

この三種は、ゲンジは安全な地域を、ヘイケは安心な食べ物の証明であり、ヒメ蛍はその地域には、洪水や地滑りや、地震等の災害が永い世紀にわたり、安寧な地域であった証でもあります。「河鹿鳴き、蛍飛ぶ里は殿様の居所」という諺も頷ける事です。

私達が今一番心痛していることは、安

全、安心、安寧な社会環境の充実で、余りにも多くの不安が将来に予測される時代となっております。

二十一世紀の世界の最大の不安は、人口の急増、公害の深刻化、核危機と食料飢餓だと指摘している識者も多く、この不安は戦争や、民族の対立や侵略を越える人類の破滅を予告する重大問題になるだろうと、強い警告を発し続けております。

私は、真の文化国家とは、安心して生活が続けられる環境、健康で安全な食料に恵まれ秩序ある社会、災害や紛争のない安寧社会、自然との良好な共生保持関係、これらが真の平和な文化国家だと思っております。

私はこれらの安全、安心、安寧な事柄を語らぬ蛍から学びとりました。人間や生き物全てに取って「水」はかけがいのない命なのです。「真の自然保護は、水の保全保護、保水対策の確立」だと信じてきました。海の水も十億年後には、一滴の水も地上に

は無くなるとショッキングな記事が新聞に出ておりました。

蛍は今までのように、感傷や郷愁や観光の観点だけでなく、人類や生き物の生存を掛けた命題として、自然から問い掛けられている重大事と思われる昨今だと思っています。

私は何時も、蛍の光や、虫や鳥の声、水音や風の音、雨音等の自然の音や声や光を「風情の文化」と思っています。これらを四季の中で、日本人の心象風景として心に焼き付けて生活を楽しんできました。日本人は特に「水」の心象を文字として「シ篇」の漢字で、千八百八十八字で表現しています。文字は一つの哲学であり、伝える文化

でもありますが、多数の水の文字が使われず、風景や河川にも生气や精彩さが失い続けてきました。

今年の全国ホタル研究大会で、平成十三年七月、二十一世紀初頭を飾る大会を米沢市でと、全国の要請を受けて、米沢ホタル愛護会が受託しました。私たちはこの機会に、県内各地のホタル愛護会や自然保護団体、安全な農産物の生産者等多くの人々と対話、協議を重ね、安全、安心、安寧をモットーにした地域作りを全国に発信したいと思っています。

蛍は、田舎らしさ、自然らしさの中で、人々の生活の中で飛んで貰いたい生き物です。

板当沢ホタル調査団調査報告 第1集

—板当沢に棲息するホタルとそれにとまう自然環境調査—

2000年4月25日 板当沢ホタル調査団発行

板当沢ホタル調査団は1998年9月に「東京ホタル会議」の内部に組織されましたが、現在は独立した調査団として活動しています。団長は東京ホタル会議議長で本会理事でもある小西正泰さんで、事務局長の小俣軍平さんを中心にホタルの分布・生態調査の他、陸産貝類などの生物相や土壌の環境調査も行っています。

調査地である板当沢は、東京都八王子市の北浅川に流入する小さな沢の一つで、都立高尾陣馬自然公園の一部にあたります。北浅川の分岐点から沢沿いに林道が1.8km続き、林道の終着点の海拔が330m、標高差121mのゆるやかな上りです。沢の兩岸にはスギ、ヒノキの人工林が多く、林道沿いにはケヤキやクリなどの落葉樹が茂り、人々も多く訪れる開かれた環境です。

この報告書では以下の項目の調査結果が

述べられています。

1) 板当沢に生息するホタル

板当沢では7種類のホタル(ムネクリイロボタル、カタモンミナミボタル、ゲンジボタル、ヒメボタル、クロマドボタル、オバボタル、オオオバボタル)が確認されています。これらの成虫の分布状況・発生時期、そして、クロマドボタル、オバボタル、オオオバボタルについては、交尾から産卵・孵化に至るまでの観察が記録されています。

2) クロマドボタル幼虫調査記録の解析

林道沿いのクロマドボタル幼虫の調査記録から生息密度、生育速度などが解析されています。

3) 板当沢の淡水貝類と陸産貝類

淡水貝類はカワナナノ1種、陸産では30種の貝類が確認されています。また、板当

沢の主な貝類のイラストも付いています。

4) ホタルの多発生地の植生調査結果

板当沢には5種類の陸生ホタルがいっしょに生息する非常に狭い範囲があり、その発生に関わる自然環境を調査するという目的で植生調査が行われました。シダ、裸子、被子植物合わせて59科145種が確認されました。

5) 板当林道沿いの土壌調査結果

ホタルの幼虫とそのエサとなる陸生貝類の生息密度の関係を調べるために土壌のpH、電気伝導度、水分含有率を測定しています。

6) 生物相調査結果

林道沿いの植物、哺乳類15種類、鳥類44種類、両生類7種類、魚類2種類、昆虫類約130種類、その他、低生動物、土壤動物の調査結果が報告されています。

この報告書はまだ第1集ですが、次のような注目される発見が報告されています。1つは浅川流域では生息していないといわれてきたナガレタゴガエルが見つかったこと、また、東京都では奥多摩町と檜原村よ

板当沢ホタル調査団調査報告

—板当沢に生息するホタルとそれとともなる自然環境調査—

第1集



り東では生息が確認されていなかったヒメボタルが見つかったこと、環境庁が指標昆虫に指定しているガロアムシが見つかったこと、そして、オオオバボタルの生息が確認されたことです。ここように板当沢は豊かな生態系を保持しているところで、今後の調査が進むにつれて、更に新たな発見が相次ぐものと期待されます。

2000 ホタルサミット in 八王子開催される

東京ホタル会議・創価大学螢桜保存会共催による「2000ホタルサミット in 八王子」が、2000年9月9日（土）創価大学学生ホールにて開催されました。演題は「国営昭和記念公園にホタルを」柴俊男（玉川上水の自然保護を考える会）、「横沢入のホタル、カワニナ生息調査」神山浩紀・吉田光正（里山遊志）、「ザリガニ駆除によるカワニナ生息環境改善」天谷昭夫（杉並区）、「埼玉県におけるホタル保全活動の概要ー越谷市の取り組みー」鈴木正明（埼玉県ホタル保全連絡協議会会長）、「野川ほたる村の活動」彦坂和夫（野川ほたる村事務局長）

でした。

昭和記念公園は建設省の管轄なので公園内で生き物を飼うことは出来ず、近々管轄を立川市の方に移すようです。野川ほたる村では「野川オアシス学校」を開校し、地域の自然を総合的に体感できる学習活動を展開しています。この活動はNHKで紹介され、そのビデオが上映されました。また、講演の後に螢桜保存会ホタル飼育場を見学しました。

多摩地域におけるゲンジボタル集団の遺伝的多様性と 保全対策〔Ⅱ〕(多摩交流センター助成事業)

2000年6月6日 東京ホテル会議発行

現在、環境庁ではいろいろな生物の遺伝的多様性の調査を行っています。その中で鈴木浩文(東京都立大学)、佐藤安志(野菜茶業試験場)、大場信義(横須賀市自然博物館)さんたちは昆虫部門のホテル類を分担しています。その結果、ゲンジボタルはミトコンドリアDNAの解析から6つのグループ(東北、関東、中部、西日本、北九州、南九州グループ)に分けられることがわかりました。しかも、それらグループの境界は明瞭で、フォッサ・マグナや中央構造線などの地質構造に対応しており、日本列島の形成と共にゲンジボタルが分布を広げてきた過程が明らかにされました(毎日新聞平成12年6月17日夕刊、東京新聞平成12年6月28日日刊)。

一方、ゲンジボタルは自然環境の保全や復元のシンボルとして取り上げられ、自然の分布状態を無視したまま移植が行われている場合が見受けられます。「東京ホテル会議」では、東京多摩地区において人為的に持ち込まれたゲンジボタルがどの程度定着しているのかを、鈴木浩文さんと共に遺伝子レベルから調査し、ホテルの保全や復元についての方策を検討しています(多摩交流センター助成事業)。

多摩地区の14箇所では調査した結果、6箇所では中部型または西日本型の遺伝子を持つホテルばかりでした。しかし、これらは中部や西日本の地域から持ち込んだものを代々飼育しているもので、遺伝子レベル

からの追跡調査が有効であることがわかりました。一方、本来の関東型の遺伝子だけを持っている所は2箇所だけで、他は関東型に中部型または西日本型が混じっているという状態でした。その後の調査から、本来ゲンジボタルが生息していたところに数を増やすために放流したことなどがわかり、人為的に持ち込まれたゲンジボタルの遺伝子が広く混在していることが確かめられました。

このような結果を踏まえて、ホテルが絶滅してしまった自然環境に移植によって復活を試みる場合は、持ち込むホテルの由来と移植先との地域性を十分考慮しなければならないということを報告しています。



ミトコンドリアDNAからみた
ゲンジボタル6タイプの分布

事務局ではニュースレターの原稿を随時募集しております。地元のホテルの会の活動やイベントの紹介などありましたら、お気軽にお寄せ下さい。

第9回日本ホタルの会シンポジウムのお知らせ

日本ホタルの会では、例年「ホタルを通じて身近な自然を考える」－人里に心なごむ自然環境を取り戻そう－と題してシンポジウムを開催してまいりました。今年度も11月17日（金）、東京都渋谷区神宮前の東京ウィメンズプラザホールにおきまして、第9回シンポジウムの開催を予定しております。皆様お誘いの合わせの上ご来場下さいますようお願い申し上げます。

日時： 平成12年11月17日（金） 13:00～17:00
会場： 東京ウィメンズプラザホール 東京都渋谷区神宮前5-53-67
TEL 03-5467-2377

入場無料

プログラム等、内容の詳細につきましては、決まり次第ご連絡申し上げます。例年の基調講演、各省庁・自治体の取り組みに加えて、今回は企業における環境を考えた取り組みについての事例報告を取り入れる予定です。

寄贈図書

「谷戸だより」 第60号、山崎の谷戸を愛する会
「2000年版キリンピール環境報告書」～持続可能な社会を目指して～、キリンピール（株）

事務局からのお知らせ

事務局が移転しました。ご連絡の際はお間違えのないようお願いいたします。

現在、本会の会計は非常にきびしい状況にあります。そのため、ニュースレターに広告を掲載することにしました。掲載料は、B5版1ページを8分割し1コマにつき1万円です。掲載していただける方がございましたら、ご連絡下さいますようお願い致します。

人里へのニュースレター 第15号 平成12年9月30日発行

編集 日本ホタルの会 ニュースレター編集事務局

発行 日本ホタルの会

〒156-0041 東京都世田谷区大原2-17-6

ステーションプラザ代田橋410（株）オーグラム内

TEL・FAX 03-3328-7379

印刷 プリントランド・スガイ

〒239-0815 神奈川県横須賀市浦上台2-27-936

TEL 0468-43-1356 FAX 0468-43-1366

